

敬愛

甲斐市立敷島中学校
学校だより 第 7号
平成30年 9月26日
発行 長田 靖

敷中と敷中生の力を見せつけた56th年輪祭

「一人一役全員主役！」



今年も天候を心配することなく、2日間（9月12日、13日）の年輪祭を行うことができました。決して長くはない準備期間の中、テーマである『**OVER**』を意識し、「去年より良いものを、今までを超えて良いものを」と、生徒主体の取組が連日展開されました。

生徒会執行部の工夫を凝らしたオープニングに始まり、個性あふれる学級旗の発表、全校生徒の手で創りあげた全校制作の披露、甲府支援学校との交流、全校や学年、学級ごとの合唱、弁論、展示見学、県コンクール金賞の吹奏楽部演奏と、充実の1日目文化部門でした。

私は、開祭式の中で年輪祭の謂われについて少し話しました。

それまで、単に「学園祭」と呼ばれていた敷島中学校の学園祭を「年輪祭」と呼ぶようになったのは、今から47年前、1971（昭和46）年の第9回です。

木々が一年一年年輪を重ねて大きく太くなるように、敷島中のよい伝統を受け継ぎ、その上に新たな歴史を重ね、少しずつ発展していきたい、そんな願いを込めてつけられたのです。

2日目体育部門は、校庭のあちらこちらで円陣が生まれ、開会式前から熱いエネルギーの盛り上がりを感じさせました。各競技ではトップもあればビリもあります。でも、それはほんのちょっとした差でしかありません。練習してきた力を出し切ること、一生懸命にやること、最後まであきらめずにがんばること、お互いの健闘をたたえ合うこと…、そういうことにこそ大きな価値があります。



2日間を通して、生徒たちの眼差しや表情、かける声、自分のため仲間のために動き、懸命に走る姿に、若者らしい真っ直ぐなエネルギーを感じました。まさに「一人一役全員主役！」でした。全員の手で、56本目の年輪をしっかりと刻むことができたと思います。

毎年少しずつ、でも確実に進化し、成長していくから、私たちの学園祭は「年輪祭」という名前にふさわしいのです。これまでの先輩たちが創りあげてきた我らの敷中。学校の進化と成長をつなげていくことは、この学校に集う生徒と教師の仕事であり、責任です。それが、やがて伝統と言われるものになるのだと信じています。

平日の開催にもかかわらず、2日間トータルで延べ640名もの保護者の皆様が参観してくださいました。生徒、職員ともにたいへん励みとなりました。ありがとうございました。